幼児期の介入システムの確立とその効果

研究協力者：犬飼和久[1)]
共同研究者：神谷育司[2)]、斎藤さつき[3)]、河合恵美子[3)]

要約：極低出生体重児の1歳前後からの発達援助としての早期介入を行った。養育環境としての両親の年齢家族構成、両親の学歴、年収など社会的経済的要因は児の発達に影響を強くあたえるが、早期介入群と非介入群との間ではこれらの要因には差はなっかた。介入群と非介入群のおける介入前および介入1年後における新版Ｋ式による発達指数には差を認めなかった。介入群の母親の感想、行動、態度では参加したことを喜んでおり、子育てにたいする悩み心配事の軽減など肯定的な点が面が多くあげられた。早期介入は発達指数上では明らかな差は認められなかったが、母親の子育て支援としては有益な方法であると思われた。

見出し語：極低出生体重児、早期介入、発達指数、子育て支援

研究目的：極低出生体重児とその家族にたいする発達支援（子育て支援）のひとつとして感覚運動的な遊びを主体とした場を設定し、その効果を介入群と非介入群とで比較検討することを目的とした。

対象と方法：対象は1996年4月より12月に出生し、聖隷浜松病院新生児未熟児センターから退院した1500Ｇ未満の極低出生体重児で脳性麻痺や明らかな精神発達遅滞のない児である。介入群と非介入群との振り分けは”遊びによる運動発達グループへのお誘い”の呼びかけと、家庭の社会経済的な環境に関する質問項目のアンケートと発送して参加の有無を調査した。その結果参加希望者９名を介入群とし、参加を希望しなかった7名を非介入群として研究を開始した。

介入の内容は当院の体育館（488M^2）で月3回（月曜日の午前10時30分より12時まで）、感覚運動的な動きを取り入れた遊びを中心に母と子が一諸になって体を動かす内容である。指導する者は幼稚園教諭と体操教室インストラクターの経験を有し且つ極低出生体重児の双胎の母親でもある。子供たちの自由時間は母親同士が日頃の子育て.についての心配事や悩みなどを話題にする時間となる。

結果：介入群と非介入群における出生体重、在胎週数、開始前の発達指数（ＤＱ）及び両親の年齢、兄弟姉妹の有無、家族構成、両親の職業、年収、両親の学歴、昼間の主たる養育者、住宅環境には差はなかった。

介入群及び非介入群の開始前の新版Ｋ式の発達指数と1年後の指数には有意の差はなかった。母親にたいする介入1年後の参加したことに対する意見では1）他のお母さんと子育ての話が出来るんが楽しい２）家事の片手間でなく純粋に子供と一緒に1時間遊んであげられた3）子供が広いところでのびのびと体を動かせられた４）子供が一人で遊んでいるのを少し離れて見守れるようになった５）覚えたことを家に帰ってから家族にやってみせたりすることで家庭内での子供についての話が多く、なった。など参加したことによる肯定的な面が数多く挙げられた。

考案：乳幼児期からの子育て支援の一環としての感覚運動的要素を持った早期介入は発達指数の上では明らかな上昇を示すことはなかった。母親の子育てしていく上での悩みの軽減や親同士の励ましの場となり子育て支援の有用な方法の一つである。特に極低出生体重児の家族、とりわけ母親にとっては.子供の発育発達が成熟児に比較して遅いために多くの心配事や悩みを抱えての子育てとなる可能性が高い。したがってハイリスクである極低出生体重児の母子にたいする早期介入をハイリスクを取り扱う施設では積極的に取り入れることが必要である。

介入群・非介入群の新版K式発達検査結果

	N		B.W(g)	G.A(d)	DQ(1回目)	DQ(２回目)
介入群	7	平均	1214.9	205.4	89.7	88
		SD	195	14.9	12.1	11.9
非介入群	7	平均	1142	198.7	96	94.8
		SD	246	8.8	10.3	14.9

1）聖隷浜松病院小児科　2）名城大学教職課程部　3）聖隷浜松病院臨床心理室
1)Depertment of Pediatrics,Seirei Hamamatsu Hospital 2)Depertment of Teacher Education,Meijo University
3)Depertment of Clinical Psychology,Seirei Hamamatsu Hospital

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:極低出生体重児の 1 歳前後からの発達援助としての早期介入を行った。養育環境としての両親の年齢家族構成、両親の学歴、年収など社会的経済的要因は児の発達に影響を強くあたえるが、早期介入群と非介入群との間ではこれらの要因には差はなかった。介入群と非介入群のおける介入前およぴ介入1年後における新版K式による発達指数には差を認めなかった。介入群の母親の感想、行動、態度では参加したことを喜んでおり、子育てにたいする悩み心配事の軽減など肯定的な点が面が多くあげられた。早期介入は発達指数上では明らかな差は認められなかったが、母親の子育て支援としては有益な方法であると思われた。